

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 宮下 聡子

本論文は、C・G・ユングの主要諸著作を広範精細に読み解き、悪を見据えつつ神と人との関係から倫理を基礎付ける「宗教的倫理」の主張をそこに探り当て、その倫理的な意義と可能性について考察することを、主たる課題としている。

その考察には主に第2部(5、6章)と終章(7章)が当てられるが、それに先立つ第1部(1-4章)も、宗教的倫理へと結実する、ユングの神体験の分析、「善の欠如」としての悪論や、神の悪魔性を無視した三位一体論など、正統キリスト教の教義に対する批判、更には心理学的な影についての所論などを読解検討して、その考察に備えるものである。

ユングには子供のころから既に、世界や、更に神の中に、悪が存在するという体験的確信があった(1章)。そして第二次世界大戦など巨悪を経験するに至ってユングは、キリスト教が悪を「善の欠如」とだけ規定することを批判し(2章)、また、神を父、子、聖霊に加えて悪魔の四位一体として把握すべきことを主張した(3章)。加えて、人間の本性には実体的な悪としての「影」が具わっていると説いて、この悪は克服不可能であり、人はこれと共存していくよりほかはないことを認定した(4章)。

神と人間が助け合いながら互いの内なる善と悪の対立の統一を果たし、最終的には人間の中で善をもって悪を飼い馴らすという境地が実現されるという物語を、論者は『ヨブへの答え』の精緻な解釈を通して確認し、これを「倫理的な神話」と呼んで、同時代人に悪との対決の意味を教えるものとして読み解く(5章)。

それに対し、理論的な宗教的倫理は「倫理的良心」の思想とされ、善悪混淆する「神の声」としての良心に、人間が「意識的吟味」を加えることで成り立つものと考えられる。人間が倫理的良心に従うということは、無道徳な神の声に聞くことによって、既存の道德律の縛りから一旦自由となったところへと超出し、その境地に立って改めて神の声に意識的吟味を加え、自覚的に悪を斥け善を選び取るということを意味する(6章)。そのことによって人は、道德律に形式的に縛られることなく、また神の権威に唯々諾々と従うのでもなく、言わば根源的な善の判断を自律的に下すことが可能となり、真に人間的なあり方に到達できると、その意義が捉えられるのである(7章)。

以上、各章ごとに独自の問題を提示し、テキストの周到な読みと先行研究との均衡の取れた対論の中で、新しい認識を紡ぎ出していく論述は、説得力に富み、しかも7つの章が一貫した問題意識によって、緊密に関連しつつ展開するのである。すなわち、倫理的には、ともすれば独断的になることを恐れて口を噤みがちな宗教的倫理について、ユングの宗教批判を踏まえつつ、微妙な語り口を探り当てようとする試みであり、またユング研究としては、分析心理学、集合的無意識、元型などの概念分析や、西洋の正統的キリスト教の刷新、錬金術や東洋の易経・禅などの再評価等々、ユング自身の多岐にわたる問題関心に応じて分散しがちな状況の中で、それらの根幹に悪への眼差しが通底していることに着眼し、それと善との関係を問うことによって、ユング思想の一つの統括的可能性を示唆したものである。その意義は、高い評価に値する。

他面、哲学史を顧みるならば、神の善性だけでなく悪性を考慮した神観は、例えばヤコブ・ベーメ、西田幾多郎等にも見られ、それらを踏まえた宗教的倫理それ自体のより多面的な展開は、今後期待されるところである。とはいえ、そのことはユング内在的な本論文にとって特段の瑕疵となるものではない。

以上により、審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するに値するものと判定する。